

イヌイト、それともエスキモー？

以前、アラスカ、フェアバンクス^{フェアバンクス}の街をエスキモーの友人と歩いていた。友人は、「大学を卒業したら村に戻って小学校の先生になり、エスキモーの伝統を村の子どもたちに教えていきたい」と目を細めながら優しく話していた。私も彼の話をしっかり覚えておこうと懸命に耳を傾けていた。そのとき、前から野球帽を斜めにかぶり、いわゆる「ラッパー」のようないでたちをした青年が歩いてきた。絶対にぶつからないようにとよけたその場に、青年は立ち止まった。そして、友人が一言、「紹介するよ、僕の弟。」私は一瞬、訳がわからなくなった。確かによく見れば顔は似ている、しかし、雰囲気、話し方、身振りがまるでその友人と違うのだ。私たちはぎこちない挨拶をかわすと、弟は小刻みにリズムを取りながら歩き去った。「弟!？」と、目を白黒させながら聞く私に、友人は、「あいつは、エスキモーじゃなくて、アメリカ人として生きるって決めたから」と答えた。

日本でエスキモーということばを使うと、ときどき怪訝な顔をされ、「正式にはイヌイトですよ」と返されることがある。私がエスキモーという呼称を使うのは、例えば、先の友人はエスキモーだけれど、イヌイトではないからである。エスキモーは、シベリアからアラスカ・カナダ、そしてグリーンランド東沿岸にかけてのツンドラ地域を居住域としてきた先住民で、アラスカの北西部を境に、ユピック（西側）とイヌイト（東側）とい

う2つのグループに分かれる。1970年代のカナダで、自分たちの呼称をインディアンのことばに由来するエスキモーではなく、自分たちのことばで「人」を表すイヌイトにしようという運動が起き、正式に認められた。日本でエスキモーという呼称が避けられるのは、このカナダでの運動の影響によるものと考えられる。しかし、アラスカのように2つのグループが存在する地域では、イヌイトということばをエスキモー全体の呼称とするのには抵抗があった。さらに、エスキモーということばの語源として定着している「生肉を食べる輩」は、実はインディアンのことばで「雪靴を編むもの」の意味であることも判明した。アメリカでは今でも Eskimo ということばは公的な場でも用いられ、またユピックやイヌイトも、日常のやり取りの中でエスキモーということばをふつうに用いる。

しかし、一歩踏み込んで彼らの心のうちを聞くと、人それぞれの思いがあることがわかる。過去に差別された経験、村から街に出た経験、歴史を勉強した経験、民族という意識の強さ、世代の違いなどから、同じユピックでも、ユピックと呼ばれたい人、エスキモーと呼ばれたい人、さらにはイヌイトと呼ばれたい人など、さまざまである。エスキモーは笑顔の絶えない少数民族と言われる。しかし、他者と接するとき、彼らのアイデンティティは心の中で絶えず揺らいでいるのである。

表紙写真
について空から望むエスキモーの村
An Eskimo Village from the Air

田村幸誠

エスキモーといえば、沿岸部に住み、クジラやアザラシを捕獲しているイメージが強いが、内陸部でカリブー（野生のトナカイ）などを捕獲しながら移動生活をしてきたエスキモーもいる。この写真はそんな内陸エスキモー（ヌナミウト、意味は「内陸の民」）と呼ばれる人たちが定住して作った村を飛行機から写したもので、この村の Debbie Mekiana さんからいただいたものである。アナクトゥービック・パスと呼ばれるこの村は、ブルックス山脈の北側にあり、人口は300人ほど。村へは

アンカレッジから2時間かけて、10人乗りの小さな飛行機で向かう。飛行機はアラスカの美しい大自然を眼下に進むが、小型飛行機ゆえ、少し天気が悪いと飛行機は揺れに揺れる。そして最後は、airstrip と呼ばれる砂利の短い滑走路に着陸する。移動生活はしなくなったものの、現在でも昔ながらの生活が数多く残っている。雪が溶けた夏には、女性はベリーやユリ根をとり、男性はハンティングや鮭漁に出かける。薪を集めたり、氷を溶かして水を作る光景も村ではまだ見られる。秋になり



夜が長くなると、オーロラが空一面にまるで踊りうねっているかのように広がる。村では、都会とは全く異なる時間の流れを感じることができる。その反面、電気と高速インターネットが全世帯に行きわたっている。家の中では、子どもたちが任天堂のWiiで遊んでいる。エルダーとよばれるお年寄りが携帯電話で楽しそうに、エスキモー語で別の村の友人と話している。その光景を見て、先のDebbieさんが「エスキモー社会とアメリカ社会、2つの世界の最高のコラボね」とおっしゃった。